

令和7年4月22日
観光部

式年遷宮に向けた庁内の取組について(報告)

1. 令和6年度の取組結果

(1) 式年遷宮に向けた庁内WG（令和6年7月3日発足）

○庁内9部局15名で構成(計4回開催) ※事務局 観光総務課

○式年遷宮に向けた現時点の各部局の取組項目を集約

情報発信

- ・全庁を挙げた戦略的なプロモーション (政策企画部)
- ・首都圏、関西圏における情報発信 (政策企画部・雇用経済部)
- ・大阪・関西万博三重県ブースを活用した情報発信 (政策企画部・雇用経済部)
- ・熊野古道伊勢路を中心とした情報発信 (南部地域振興局)
- ・文化観光の情報発信 (環境生活部)
- ・県立図書館、総合博物館における関連展示 (環境生活部)
- ・県内ホテル・レストラン等と連携したみえの食フェア (農林水産部)
- ・遷宮の諸行事と連動した観光プロモーション (観光部)
- ・メディア等を活用した海外への情報発信 (観光部)
- ・神宮関連や伊勢周辺の文化財に関する情報発信 (教育委員会)

受入環境整備

- ・二次交通確保の取組推進 (地域連携・交通部)
- ・交通事業者と連携した宿泊商品の企画促進 (地域連携・交通部、観光部)
- ・伊勢志摩せんぐう旅博実行委員会との連携 (観光部)
- ・観光ガイド人材の育成などの受入環境整備 (観光部)
- ・観光産業における生産性向上の取組 (観光部)
- ・道路ネットワークの強化・無電柱化の推進 (県土整備部)

(2) 式年遷宮を契機としたおもてなし推進チーム（令和6年9月2日設置）

○観光部内5名で構成

○式年遷宮に向けた関係団体の動きなどの情報収集

○取組方針の整理：取組の効果を全県的に波及させるためには、①地域との連携、②周遊促進、③インバウンドへの対応が重要

2. 令和7年度の取組

式年遷宮に向けたさまざまな行事が始まるため、地域関係者としっかりと連携して来県者をおもてなしし、取組の効果が全県に波及するよう「式年遷宮を契機としたおもてなし推進チーム」や「式年遷宮に向けた庁内 WG」において、中長期的な取組の検討を進める。

令和の御遷宮を目指して

新しい「令和」の御代に伊勢のまちの伝統をつないでいきます。

令和3年

第50回記念 初穂曳

はつほびき

神宮の神嘗祭を奉祝し初穂を奉納する行事を伊勢の祭りとして起こしていくと共に「お木曳」「お白石持」の技術を毎年継続することで次世代に伝えていくことを目的に、昭和47年から開催されている初穂曳。川曳は地域で持ち回りで実施、陸曳は、神宮の3台の奉曳車を伊勢神宮奉仕会青年部が中心となり運行にあたっています。お木曳の準備が始まる時期でもあり、注目いただきたい第50回の節目です。

令和7年

山口祭く御杣始祭

みそまはじめさい

山の入口の神様に安全を祈り、御杣山で御樋代の用材を伐り出す祭儀から御遷宮が始まります。

御樋代木奉曳式

御樋代とは、ご神

浜参宮

はまさんぐう

本曳にあたって事前に二見興玉神社へ参拝する行事「浜参宮」。それぞれの団が独自で行う行事。禊ぎとしてお祓いを受け身を清め、本曳に臨む慣習です。

が「御樋代木奉曳式」。本曳の前の年に行われます。

令和8年

伊勢の民俗行事 第一次 お木曳行事

第一次には本曳きに先立ち、お木曳初式（役木曳）が、それぞれ役割を担う団により執り行われ、後日、全団が参加する「般奉曳（本曳）」がはじまります。

令和9年

伊勢の民俗行事 第二次 お木曳行事

第二次は本曳のみ、第一次と同様の開催時、期間で行われます。以前は、扉木など重要な用材を第三次として行っていました。昭和以降は第一次・第二次に含んだ行程が組まれるようになりました。また、前回より金土日の週末の開催とされ、時代に合わせながらより市民の参加が得やすいように運営されています。

令和11年

宇治橋 架け替え 渡始式

わたりはじめ

御遷宮に先駆け、約一年かけて宇治橋の架け替えが行われます。

令和15年

伊勢の民俗行事 お白石持行事

しらしいもち

「お白石持行事」は、「お木曳」と同様に新しい御正宮の敷地に敷き詰める「お白石」を奉獻する伊勢の民俗行事です。宮川でお白石を採拾し、町々の奉獻団が内宮・外宮両宮へと奉獻します。神域に運び入れた後は一人ひとりが御遷宮間近のご正宮御垣内、内院まで入り「お白石」を納めさせていただく貴重な行事です。

令和15年

次期

神宮式年遷宮

六十三回目（予定）

※一連の行事開催年は前例を反映した予定です。社会情勢等により変動する場合があります。

伊勢のごせんぐう

伊勢御遷宮委員会 広報紙 特別号／令和2年2月23日発行

編集発行・伊勢御遷宮委員会

伊勢市岩淵1-7-17(伊勢商工会議所内)

電話0596-25-5215

■表紙写真／撮影 中野晴生

